竹田市（たけたし） 総括会議

ハピカム

ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」第7弾竹田市編が6月15日、同市の竹田市総合社会福祉センターなどで行われた。「農業」「観光」「創品」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、各分科会で出された「ミライへの鍵」をどのように実現し、竹田の活力を生み出すかについてさらに議論を深めた。その中では、市内に素晴らしい素材と魅力があるが、それぞれが点と点になっており、いかに線や面として売り出せるか。そして、市内で若者がさまざまな挑戦を行っているが、世代間にギャップがあり取り組みが広がらないという「横」と「縦」両方の課題に対して、それを解決するためのつながりをどうつくっていくかが話し合われた。出席者は、若者の挑戦の重要性とともに、“若さだけ”に陥らないような深いまちづくりを進めるため、この日の出会いをきっかけとして新しいつながりを生み、新しい竹田の魅力を創造することを誓い合った。

■ウェブ http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／竹田市　竹田商工会議所　九州アルプス商工会
協賛／国立大学法人 大分大学　㈱大分銀行　㈱NTTドコモ九州支社大分支店　日本たばこ産業㈱熊本支店　くじゅう花公園

竹田見捨てるのか？挑戦しろ

次の一手を打たないと

佐藤　それぞれの分科会で「ミライへの鍵」を挙げてもらいました。開会式のあいさつで姫野先生から、竹田はやれるべきことは既にやっているんじゃないかとのお話がありましたが、そのことについて先生いかがですか。

姫野　一般論的にこういう条件の時はこうした方がいいんじゃないかというのはあるが、それなことは竹田では既にやってますね、という意味です。それ以上のことについて、やはり現場でしか分からないことがたくさんあると思うんですよ。現場の人たちが知恵を出し合うからこそ生きれてくるものがあって。そういうことが大事だね、という話がどの分科会でもなされていて、竹田は思った通りの地域だなと感じました。これまでいろんなことをやってきたけど、通り一遍ではない次の一手を打たないと、という話も挙がっていました。そこの部分をどうブレークスルーしていくのかというときに今回のいろいろなミライへの鍵が キーになってくるのかな、と思っています。

佐藤　観光分科会で次への一手の話が出たんですか。

岩切　そうですね。いろんな素材や人材やものなどはあるんですが、それが生かし切れていないんじゃないか、お客さんに伝わっていないのではというこがあります。そのために点と点の状態じゃなくて、線とか面でつながっていくように、お互いの素材をもうちょっと勉強して、新しい一手へ共存共栄を目指すべきじゃないかと。周りを理解して周遊型プランなどに発展させないと、リピーターになってくれるような観光にはつながらないんじゃないかと思っています。

姫野　創品分科会の中で少し似ている お話が出ました。次の一手というより、どうそのアイデアを生み出していくかということで草刈推峰（しょうほう）さんが、竹田にはいろんないものがあるが、まずはそれを置いておいてから腹を割って話し合う場が必要なんじゃないか、そこから生まれてくるアイデアがあるんじゃないか、と言っていました。人との関わりの中で生まれるものがあると思うんですが、実体験の中でのエピソードを教えてもらえますか。

氏田　分科会の中で出たのは、竹田にとらわれすぎている、ということです。自分たちは狭いのでゼロから考えて、自分たちでできることに挑戦していったらいいんじゃないかな。

いろいろと批判される

佐藤　何かやろうとすると、いろんな批判があると思うんですが、そのとき応援してくれる仲間のアイデアで生まれるものがあったのでは。

氏田　去年竹田にもつ鍋店を出店したのですが、最初はかなりたたかれました。「お前、頭大丈夫か」「わざわざ福岡で修業してきたのにこんな田舎でしなくていいじゃないか」とか本当にいろいろ言われました。僕はそういう人たちの意見は一切聞かずに、草刈さんや甲斐（昇一郎）副社長（創品分科会）たちからバックアップを受けて、今やれています。あちゆる人にベコベコ頭を下げて機嫌を取っている人が多くて、自分が信じたものをまっすぐ見つめて突っ走るという人が少ないと思います。そういう思いでやれば必ずバックアップしてくれる人が出てきます。

姫野　まちづくりや地域で何かやっていくのはやはり難しいですが、実際は1人では闘えない。そこにこういう先輩方がいて後押ししてくれた、本当に素敵な関係がある地域だと感じました。

佐藤　そうですね。成功の裏には必ず認めてくれる人がいるんですね。農業の分科会でつながりの話は出ましたか。

植木　私は生を飼っているんですけど、はなぐりの会という若手の会があって、先日40周年式典を行いました。準備を1年前から一丸となって取り組んだんですが、最初は乗り気だった人が「何でそこまでするんだ」などいろいろな意見が出ました。その中でやり終え、みんなで頑張ったという一生の思い出に残りました。先ほどのつながりの話はすごく勉強になりました。

農業／若手リーダー
Shunsuke Uekí
植木俊輔 さん
竹田市久住町、32歳。久住高原の植木牧場で100頭の肥育素牛生産を行う。和牛生産若手の会はなぐり会に所属し、農業の6次化についても学んでいる。

佐藤　つながりというのが何をするにも大事になりますね。農業分科会は畜産の方、米作の方、トマトの方がいましたが、そのつながりの話はできましたか。

植木　3者とも地元に根付いてなりわいをしていると、水のこと、田んぼのこと や野焼き、草刈りなどの様さは共有しているんだなと思いました。

姫野　植木さんが牛を育てるのはとても大変なので相談し合いながら育てている、その相談が楽しいと話したのが印象的でした。つながりを少しエクスパンションして、違う業種を有機的につなげてみるという方法がいいのかな、例えば佐藤勝己さん（農業分科会）が作っているトマトと野尻成尚さん（同）が作っているお米と植木さんが作っているお肉を使ったリゾットがあったら、すごく食べてみたい。私が言ったのは一般論ですが、舞希さん（観光分科会）は、お店づくりのときに一般論じゃない竹田らしさを徹底的に探っていかないといけないと話していました。それはたぶん現場からしか出てこない。

真剣に取り組み楽しく

佐藤　「自分たちが楽しく」というのは一つの鍵になると思いました。人を呼び込むためには自分たちが楽しめることが大事なのでは、という話 ちろん、ホースのウマだけでなく、農畜産業でおいしい物をつくろう、うまいものにこだわろうという意味も込めている。最後の「つなげる」は、地域の中で同じ農畜産業に携わる者同士が横のつながりを大事にしていこう、ということと、それぞれが親から受け継いできたものを子どもにもつないでいきたいという意味を込めた。

「農業」分科会まとめ

楽しくウマくつなげる

“ミライへの鍵”

ミライへの鍵は「共存共栄」。どうすれば観光客を増やせるかについて、リピーターの獲得と周遊型観光を主な議題とした。観光を発展させるためには、観光客に来てもらう、そしてリピーターを増やすことが大事。そのための課題は、自分たちが観光地に満足できないとは、客にも満足してもらえないということ。まずは、自分たちが満足できる観光地づくりを進めていこうと一致した。その上で人の温かさ、めぐもりが伝わることがリピーターにつながるのではと提言された。周遊型観光について、例えばくじゅう連山の登山客が岡城跡に立ち寄り、長湯に泊まれば延べ3人の観光客。周遊してもらえば「1泊2となり3となる。竹田の観光スポットは距離が近く立地条件に恵まれているが、課題は互いによく知らないこと。歴史・温泉・自然が三位一体となり、周遊のように共存共栄の意識を持ってリピーターを増やし周遊性を高めていきたい、とまとまった。

「観光」分科会まとめ

共存共栄

“ミライへの鍵”

ミライへの鍵は「挑戦」。これは、起業するにも、新しい商品を開発するにも、創品のためにはしっかりとした理念を持ち、勇気をもって挑戦すれば、とやかく言う人はいるかもしれないが必ず認めてくれて、きちんと応援やサポートをしてくれる人も出てくるので、ますます動きだそうという意味。分科会メンバーでは4人とも一度は竹田を離れ、市外で生活をしている。外に出た理由は当時、古いしきたりやしがらみなど、竹田に負のイメージを持っていたから。だが、一度外に出て戻ってみると、竹田が持つ歴史・文化・自然などが大きなアドバンテージになっていると感じている。いろんなことにチャレンジ出来ることを若者も出てきている。世代を超え、良いものは良いと素直に認め、古い伝統の良さも守りながら竹田の新しいまちづくりを進めれば、竹田に負のイメージを持っていたから。だが、一度外に出て戻ってみると、竹田が持つ歴史・

「創品」分科会まとめ

挑戦

“ミライへの鍵”

上の世代を上手に巻き込め

農業／アドバイザー
Daisaku Ishi
石井大作 さん
福岡県出身、35歳。イオン九州SV（スーパーバイザー）部太分・宮崎事業部の食品担当。2000年に入社し、昨年9月から現職。宮崎県日向市在住。

佐藤　創品分科会のミライへの鍵が「挑戦」でした。トマトの話にこだわることも大きく捉えれば挑戦だと思います。植木さんは新しい牛舎を建てて200頭くらいに増頭すると聞いたんですが。

植木　1次産業に関わる人間は、目立たない挑戦をしている方も多いです。先輩方にもキラリと輝く技術を持つ人がいます。うちの経営に関しては増頭しつつ、品質を落とさずに満足していただくものを届ける、というのが自分の挑戦だと思っています。

佐藤　観光ではどうですか。

岩切　ビジネスをやっている以上、挑戦していかないと会社がつぶれるな、とはいつも思っています。観光の中でも新しいものやイベントをしっかり自分から発信して、前に前に進もうとしています。リスクばかり考えていたら何もできません。観光が廃れてきているのは実情としてあるので、挑戦して新しいものに変えていかないとなくなってしまうというのは全員が感じていると思います。

姫野　キラリと光ることはやってきています。大事なのは磨くだけじゃなくて磨き上げていくこと。そのときに、物語性があるんだと。だけど伝えているかというとこころになんだと思います。分かりやすく消費者やバイヤーに伝えていくことが大事。自分たちで伝えることもいいですが、新聞社が今回のような場をつくっていることは、その伝える術（すべ）になると思います。新聞社の皆さんに期待しています。

佐藤　観光を利用して売り出すというのも一つの手だと思います。

姫野　そういう記事にはハピカムのマークを付けるといいんじゃないかと思います。これをこ縁にぜひご検討ください。

佐藤　これまでの開催地で、ハピカムをきっかけに商品が生まれたケースがあります。つながりというキーワードが出ているので、その話を深めたいと思います。姫野先生いかがですか。

姫野　創品分科会で志賀明日香さんが、「一度竹田を出て帰ってきて、もう一回出ることを考えていたが、市役所の仕事でいろんな方々と関わる中で自分の役割や居場所を見つけ、自分がここにいる意味になっている」と話していました。居場所は地域と関わることによって初めて生まれるんだと思います。もう一つ、創品分科会で三浦さんが話していましたが、ビジネスを起こすには事業主が相談できる相手や環境があることが重要で、助け合える社会的土壌が社会の資本なんですよ、と。竹田には、部門ごとのつながりがあると思います。

結果で共感してもらう

佐藤　上の世代とのつながりも大事ですが、実はここが大きな障壁になっている部分がないでしょうか。今日は若い世代の集まりなんで、その辺の本音を聞かせてください。

観光／若手リーダー
Yoshinobu Ujita
氏田善宣 さん
竹田市、29歳。WOOD HOUSE代表取締役。竹田市と大分市でもつ鍋「陽はまたのぼる」を経営している。3店舗目の出店を計画中。

氏田　僕の周りの経営者には「竹田を変えてやる」というすごいエネルギーがあります。一方で、もう年金をもらっていて商売はほぼもていないと考えている年配の方と足並みをそろえるのは無理な話。やはり若いメンバーが集まり、異分野の人ともつながって、もっと大きいエネルギーで大きいイベントなどできたらいいと思います。

佐藤　頑張ろうとしている若い世代と、少し引いている上の世代のギャップなんだと思いますが、観光分科会で世代間の問題が出ましたか。

岩切　どこも同じかもしれないですが、年配の方は「俺たちがさんざんやってきたから」「それは無理でしょ」など最初から ネガティブ発想が多いです。言葉で話しても分からない部分はあるので、まず結果を見せて共感してもらい、手伝ってもらう。解決するためにはまずやってみることが大事だと思っています。

佐藤　首藤文作さん（観光分科会）とお話をしたとき、長湯に若い人が集まっているが上の世代の人と意見が若干違っていて、うまく意見を聞きながらやっていっていると言っていましたが。

首藤　僕も自分たちの世代がやらなくてどうするんだと思っています。新しいイベントをするときにはぜひ賛同する人がいます。批判があるのは必然だと思います。やる気を見せて行動すれば、同じ気持ちを持つ人は必ず自分のことを見つけてくる。自分がそういう人を見つけられるかもしれない。信じて行動するしかないんですね。僕は新しいことをやるのはすごいことだと思います。たとえ結果的に失敗しても一つの形をつくりあげた人はリスペクトすべきだと思います。

佐藤　農業分科会では、上の世代とのいっぱなしなりの話が多かったと思うんですが。

植木　上の世代の批判がないことはないですが、やはり同じものづくりで、同じ目標を持った者としてお互い工夫と悩みの毎日なんで、世代を超えた交流があります。

佐藤　世代間の交流を上手にしていくことが、竹田を良くしていく大事なポイントなのではと、思います。周遊性の話が出ましたが、周遊性は必要なのでしょう。

姫野　旧1市3町にはそれぞれに際だったものがあります。しかし周遊の根底のところでは ながっていると思います。ただ、物理的なルートのつながりがあったとしても、それぞれの際立った カラーは別物でないと面白くない。竹田といえばこれだという同じ色は必要ないという気がしています。むしろいろいろあるのが竹田でしょう。

足元磨き上げる大切さ

佐藤　全く同意見です。あえて一つに、というのは難しいし、意味がないと思います。若い切れ んが、違う観光地のいいところをそれぞれ説明できるようになることが大事だと言っていましたが。

岩切　せっかく足を運ぶならどこかで お金を稼いでいこうという観光の流れでした。でもそれぞれ輝いているので、周遊型で回ってもらわないとだめなんじゃないかと考えています。観光プランを立てるときに食事の要素は大きいので、食のコーディネートをもっと観光に入れたいなと思っています。

観光／若手リーダー
Shintaro Iwakiri
岩切慎太朗 さん
竹田市久住町、29歳。宮崎県出身。研修センター・体験農園の運営を手掛ける「くじゅふるの大地」取締役。竹田はあとプロジェクト協議会長。

佐藤　食を中心にして竹田を一つにということでしょうか。

岩切　そうですね。食のブランディングをやっていくべきと思っています。ストーリー性があるものが地域に根付いて発信されていれば目玉になるんじゃないでしょうか。

佐藤　竹田にあるいい素材を一体として売り出していくべきか、それとも個々を磨くべきでしょうか。

氏田　飲食に調き換えて考えたら、竹田市という店の中に長湯や久住高原など四つか五つの商品があって、どれかいいかと尋ねられても答えられない。だから僕の店はもつ鍋を専門にして、来ていただいたら他にもこんな売りがあると紹介しています。竹田市はこれというメニューのものがなくて困ることがないこと、逆に全ての料理を4番バッターにして繁盛している居酒屋もあります。

佐藤　どっちかという答えは難しいと思います。

姫野　今は焼き上げる作業に取り組まれていますが、それが極まってきたときに弾けてつながっていくような部分が出てくると思うんですよ。それは一度にパッとつながるのではなくて、少しずつだと思います。先に何があるか見ながら足元を磨くのはとても大事ですが、エネルギーある 竹田なら自然発生的につながっていけるのではと感じました。

総合アドバイザー
Yuka Himeno
姫野由香 さん
大分市、37歳。大分大学工学部助教。工学博士。専門は建築・都市計画。景観創造、景観維持を中心に、自主的な地域運営についても研究中。

意見くみ上げ外に出す

佐藤　無理やりつくるものでなく、自然発生的にできるんだということですね。アドバイザーの皆さん、世代間のつながりと周遊性の点でいかがでしょう。

姫野　それぞれに魅力がある観光地があるので、線と線でつなぐより、おむいが使い合える環境があれば変わってくると思います。例えば長湯に来たお客さんに対して、この山の向こうに久住という魅力的な場所があると紹介することで人が同り出すんじゃないでしょうか。業種間を超えても伝えることで、つながり や関わり合いができる気がします。まだおむいを知り得てなくて、うまく伝えきっていないので、それができれば周遊という関わりができると思います。

三浦　事例を一つ挙げさせていただきます。佐世保はもともと観光資源がなくて、観光客がほとんどいない所でした。市民が危機感を持つ中で生まれたのが佐世保バーガーでした。60代のキーマンが語っていたのは、若い世代の意見をくみ上げて外に出していくのがわかれわれ世代の仕事だと。上の世代にも役割があるので、若い世代はうまく上の世代を巻き込みながら自分たちのやりやすい雰囲気をつくることが大事です。

石井　地域の生産者の方と関わる機会は多かったのですが、同世代の生産者と話したことはほとんどありませんでした。同世代の方が高い志を持って1次産業をやっていることを知って、すごくうれしいです。この世代の方が、いいところを次世代につなげて、20年後の世代も今と同じように輝けるようにしていただきたいと思います。

縦の交流と横の広がり

佐藤　先生、全体を通して何かあれば。

姫野　お話を聞いて感じたのは2点です。一つは渚りをもって徹底的に磨き上げていくということ。もう一つはつながるということです。まちづくりでは「よそ者・若者・ばか者」が必要と言われてきましたが、今はもう1要素必要。地域が持続可能であるためには、世代間で知恵を貸したり借りたりする関係ができないといけないと思います。いずれは自分たちも上の世代になり、その時にどういう役割を担わないといけないのか、エネルギッシュな今の自分が考えていくことが必要です。上の世代が持っている知恵や経験に耳を傾けられなくなると、若さだけになってしまう。上の世代と上手に関係をつくりながら、自分たちの やる気もそがずに活動し、なおかつ次の世代をどうサポートできるのかを考えていける地域が、持続可能性を持つと思います。

佐藤　深化と強化という二つのポイントだと思います。いろんな素晴らしい取り組みをしていますが、今はそれぞれの努力を深く極めていく時期なんだろうと。その次に強化、それは縦軸に縦の交流です。上の世代を上手にきき込んで教えを請い、歴史や伝統などを吸収して新世代の考えと融合させ、そのことでいろんな取り組みの縦軸がしっかりしてくると思います。その後、横のつながりは自然発生的にできると思います。今日の集まりを足掛かりにして横のつながりを生み出してほしいと思います。今までなかった交流から何らかの化学変化が必ず起きる。その中からアイデアやムーブメントが生まれてくるんじゃないかと思います。その先に新しい竹田が見えてくるんじゃないでしょうか。そのお手伝いは大分合同新聞がやっていけたらな、と思います。いろんな世代の人に竹田に行ってみたいと言われるまちになっていければいいと考えています。本日はありがとうございました。

総合コーディネーター
Ichiro Sato
佐藤一郎
1992年大分合同新聞社入社。整理部を経て校閲部長。45歳。魅力あふれる人たちに、魅力的な観光資源、キラキラ輝く竹田のアンコに！

これまでのハピカム開催地／平成23年度 ①宇佐市（10月）②津久見市（3月）　平成24年度 ③九重町（6月）④臼杵町（9月）⑤国東市（12月）⑥臼杵市（3月）　平成25年度 ⑦竹田市（6月）

大分を学ぶ

竹田市編　神原緑側カフェ

地域の課題解決図る 田舎で輝き隊！の実践

大分大学経済学部の「田舎で輝き隊！」は、実践から地域の課題解決を図る活動をしています。現在、県内4地区で実践中ですが、竹田は同市神原地区で「緑側カフェ」を毎月開催しています。

神原地区は農家民泊が盛んでしたが、高齢化などにより徐々に取り組む人が減っていました。また、緑側カフェも地域活性化のために考えられましたが、運営を担う人がおらず定期開催には至っていませんでした。そこで昨年6月から学生が運営のお手伝いをさせていただいています。緑側カフェには、民家の縁側でお茶と地元食材のお茶請けをいただきながら、地区の人との会話を楽しむというものです。

運営をする中では、逆に地域の人々に助けられることもたくさんあります。実際に足を運びコミュニケーションをとることで、大学の机に向かっていては絶対に聞けない本音を聞けます。過疎化、高齢化という『知っているはずの現実』も、切実な自分たちの話として語られるようになります。

また、運営は楽しいだけではなく、マニュアル作りや資金面の計画、ポスター制作、掲示、活動報告、協力者らとのアポイントなど多岐にわたる準備が必要です。そして勉強やアルバイトとの調整にも苦労しますが、社会人になったら必ず求められる課題解決能力」を身に付けることにつながっていると思います。

地域の課題解決に特効薬はありません。まだまだ、学生には4年間という限られた時間しかなく、メンバーが変わるたびに人間関係を築く必要があります。学年間の連携を密にしつつ、先輩のつくった地域との信頼関係をベースに活動をどう発展させていくかが課題です。「私たちは、地域と関わることが好きで輝き隊に入りました」神原がいつまでも緑側カフェで人を迎えられる元気な地区であり続ける お手伝いをしていきたいと思います。

［参加者］
3年
浜野康成
坂口耕介
江戸祐貴
2年
三ヶ尻綾香
松尾和樹
阿部裕磨
原田美緒
森潤人
佐藤健太

国立大学法人 大分大学
OITA UNIVERSITY

□旦野原キャンパス　〒870-1192 大分市大字旦野原700番地
□挾間キャンパス　〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地
□王子キャンパス　〒870-0819 大分市王子新町1番1号

ラベンダー色に染まるイベント盛だくさん！

ラベンダー摘み取り体験

ラベンダーの香りに包まれて摘み取り体験はいかが？香り際立つラバンディンという品種を植えています。1リンク300円で初夏の香りのお持ち帰り。

ラベンダーオイルの抽出実験

蒸留器を使ってラベンダーオイルの抽出実演です。抽出したラベンダーオイルを香ってみてください。本物のラベンダーの香りが体験できます。

ラベンダークラフト体験

ラベンダーを使ったラベンダースティックやラベンダーファブリックの制作。スタッフが楽しく分かりやすく作り方をご指導します。

ラベンダー香りグッズの販売

ラベンダーポプリやフレグランスなどラベンダーの香りグッズを集めました。すがすがしい夏の香りをお楽しみ下さい。

高原に広がる五色のスカシユリ

ユリ畑には、赤・黄・ピンク・オレンジ・ホワイトの5色のユリが植えられていて、ちょうどラベンダーと同じ開花時期で一緒に楽しめそうです。

ユリ畑（6月中旬～7月中旬）

夏の彩り4色のケイトウ

赤・イエロー・オレンジ・ピンクの4色のケイトウが夏の光を浴びて輝いています。今年のテーマは宇宙の銀河がテーマです。

ケイトウ（7月上旬～9月上旬）

情報盛りだくさん！最新情報を発信中！

最新の開花状況やイベント情報を随時更新中！お花や観光に関するお問い合わせやメールを新設！

http://www.hanakoen.com

くじゅう花公園
〒878-0201 大分県竹田市久住町大字久住4050
tel.0974・76・1422
http://www.hanakoen.com
●営業時間／8:30～17:30
●入園料金／大人（満4歳以上）1000円　小人（3歳以上）400円　シニア（70歳以上）800円